
喫茶 阿

あき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喫茶 阿

【ZZード】

Z3884Y

【作者名】

あき

【あらすじ】

これは、喫茶店「阿」に集う、そんな『誰か』の物語。

I 喫茶 ハンディパークー（前書き）

閑静な住宅街を過ぎると、道は途端に海に向かって緩やかな傾斜を描きはじめる。

灯台の立つ岬に向かつて高い一本道の途中に、木々に埋もれるようにその店はある。

道端に置かれた手作りのウッドチャニアに、小さな黒板が看板がわりに立てかけてあった。

所々かすれではいるが、その文字はこう読めた。

『喫茶 阿』

これは、喫茶店「阿」に集う、そんな『誰か』の物語。

一品目 ハレンドパークー

小洒落たアンティークの扉を開けると、カウベルが来客を告げる。
「じんまりとした店内は、カウンター席。

窓際の三角の二人掛け。

柱時計の横の四角い四人掛け。

観葉植物の並ぶ丸い三人掛け。

カウンターの奥でふうんわりと微笑むマスターは、レコードに針を落として、ふと海の見える窓側の席に視線を投げる。
三角の机の上に湯気をあげるカップがふたつ。

「で、お姉ちゃんはどう思つわけ？」

「どうって言われても」

「はつきりしてよ。好きなの？嫌いなの？」

「好きも嫌いもないわ」

「じゃあ、どうでもいいわけ？」

「どうしてそうなるの？」

「好きも嫌いもないなら、少なくとも愛じやないでしょ。それなら

無関心しかないじゃない」

伸びてきた手がカップを持ち上げる。

「熱つ」

「熱いのだめなんだから気をつけて」

「もう冷めたかと思ったのに」

「見ただけでは解らないものよ？」

「やうね。お姉ちゃんの恋愛みたいね」

ミルクがぐるりと円を描いて、ブレンズコーヒーの色を変えた。

「ほんと、冷めてるのか熱いのかわからんないよ
あらそつ？」

「振り回されてるお兄ちゃんが可哀相じやない」

「ふふ。嫌ならやらない人でしょ」

「それは、そうかもだけど」

「貴女が嫌なら止めるわ。私達の仲が悪くなるのは嫌だから」

「なんでそうなるのよ！私はお兄ちゃんとお姉ちゃんを応援してる
の！」

汽笛の音が、窓から滑り込んで角砂糖と一緒にブレンズコーヒーに溶ける。

「なによつ

「応援、してるの？」

「してるわよ！お似合いだと想つんだから仕方ないでしょ」

銀の匙が、カッピに当たって音をたてた。

「直覺はないけど、監視させないと、極度のシスコンでブランコんじこし」

「あら、貴女が？」

「そうよ。仕方ないわ。お兄ちゃんとお姉ちゃんが並んでるのが好きなんだもの。だから、好い加減素直になつてよね」

「ふふ。ありがとう」

「珈琲、ご馳走様でした」
「ありがとうございました」

カウベルが穏やかな音を立てて、少女と彼女の腕の中の白猫を見送つた。

開いた扉の向こうの先。

ウッドチェアの横で、涼やかな田元の青年が一人を迎えるように笑つた瞬間に扉は閉じて。

カウベルは一際大きく啼いた。

マスターは小さく微笑んで、レコードの針をあげる。

「またのご来店を、お待ちしております」

I 四品 チーズケーキ（前書き）

閑静な住宅街を過ぎると、道は途端に海に向かって緩やかな傾斜を描きはじめる。

灯台の立つ岬に向かつて高い一本道の途中に、木々に埋もれるようにその店はある。

道端に置かれた手作りのウッドチャニアに、小さな黒板が看板がわりに立てかけてあった。

所々かすれではいるが、その文字はこう読めた。

『喫茶 阿』

これは、喫茶店「阿」に集う、そんな『誰か』の物語。

一品目 チーズケーキ

小洒落たアンティーケの扉を開けた正面には、カウンター席と小さなショウウケースがある。

そこに並ぶのは日替わりの和洋菓子。

今日のショウウケースは、チーズケーキとフルーツタルト、マドレーヌに苺大福、羊羹。

カウンターの奥でふうんわりと微笑むマスターは、カップを磨く手を止めて、柱時計に目をやつた。

四角い机には、少し大きな二等辺三角形のチーズケーキ。

「それじゃあ、私が先に貰うよ」

「どうぞ。あ、解ってると思うけど」

「はいはい。三角に切り分けられなくなつた時点で負け、だね」

「うん。それに、今回はもともと三角だから」

「切り分けは一回、パスはなし、か」

「そう。あと、前回は君の負けだつたよ」

「小指サイズのクッキーに、そこまでの強度を求めないで欲しいけど」

同じ長さの一辺に対し垂直にフォークが入つて、正三角形に切り取られたチーズケーキが皿から消える。

「はい、次はそっちだね」

「今日は元々三角形だから、簡単過ぎるか」

「まあね。この間の七角形煎餅は大変だつたね」

小さな一等辺三角形が切り出されて、あつという間にチーズケーキは半分近くになってしまつ。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます。それにしても」

「何?」

「チーズケーキを食べる」とになるとは思わなかつたよ。君となら、オペラとかミルフィーユだと思つてたから

「どちらも、スクエアが定番のケーキだね」

「そう。君は一人で食べるときは丸いもの、一人で食べるときは角もの。どうぞ」

薄く小さく食べられたチーズケーキの皿が机の真ん中から移動した。

「解つてた?」

「途中から、なんとなくね」

「角は、三角でできるから相似になる。でも丸は、三角だけじゃうまくできないから」

皿のチーズケーキを半分にして、せくじとケーキに木串が刺される。

「はい。あとはあげるよ」

「丸くなつて、壊れるのが怖い?」

押しやられた皿が途中で止まつた。

「嫌なところよね」

「あのさ、君は一人を繋ぐもの、例えば糸みたいなものが、切り出せるのは角だと思ってる」

「そうだね」

「だけど、両端を持つた一人が手を繋げば、紐は円になれるんだよ」

「気障つぽい」

「解つてゐるよ」

「でも、ありがと」

「どういたしまして」

空っぽの皿がぽっかりと浮かぶ月のようだ、四角い机の真ん中で光を受けた。

「チーズケーキ、『駄走様でした』

「ありがとうございました」

「四角いチーズケーキを三角に切つて出すお店って、珍しいよね」

ひらひらと手を振つて、一人の少女は手を繋いで店を出ていく。

「君の好きな丸いアップルパイ、今度一緒に食べに行つていー?」

「一人でひとつで良いならね」

「勿論」

磨き終えたカッブを棚に戻して、マスターは小さく微笑んだ。

「またのじ来店を、お待ちしております」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3884y/>

喫茶 阿

2011年11月24日21時48分発行